

## レジャー及び生涯スポーツとしての海洋講座(マリンプログラム)

～大学におけるヨットカリキュラムの検討～

○上野 直紀(明星大学)

鈴木 秀雄(関東学院大学)

Leisurability, Leisure Directionality, ヨット教育, マリンプログラム, クルージング

## 1. はじめに

日本における戦後の余暇をたどる時、昭和20年代後半の大衆余暇萌芽期の後、本格的な余暇時代の到来(昭和30年 高度経済成長期)に至る。レジャー産業が拡大し、次第にファミリー・グループレジャーの普及がすすみ、アウトドアレジャーを誘発(昭和40年代)し、さらにモータリゼーションの一般化や若年層への浸透は海洋性レジャー活動をより一層進展させてきた。

余暇社会の到来は、労働時間の短縮の動向とともに日本人を“会社人間”からの自己の主体性(Self Identity)を確立するために着実に“社会人間”へと変革する為の好ましい機会となり得る要素をもつものとして、今後の余暇をめぐる問題は活発に論議されるべきところとなってきた。人生80年時代にあつて余暇時間がその人生の3割、21万時間に及ぼうとする時代、あらためて余暇の概念の複層化と余暇の機能の複合化をもたらした。余暇を“Mere Play”から“Scholē”に至る広い概念把握のもとに、いかに使用、利用、活用するかは個人の余暇能力(Leisurability)のみに委ねられてよい時代ではないといえる。余暇機能(休息、休養；気晴らし、娯楽；自己啓発、自己実現)のそれぞれのスパンをいかに広いものとし、社会環境、余暇意識(Leisure Awareness)の整備や余暇技術、人間交流などの余暇活動に必要な要素もしっかりと教育、学習できる仕組み(メカニズム)を社会の中に確立すべき時代である。余暇そのものの位置づけや価値を明確にする為にも個人が自らの視点で余暇を見極めつつ、状況、条件、環境要因に合致した自らの方向性(Leisure Directionality)を求めていく時代でもある。

多様化するレジャー活動にあつて、ここでいう海洋性レジャーとは、主たる活動空間が海洋におかれたものであるが、広い意味では海洋に限らず、水の存在を前提としたレジャーであるといえる。

レジャー及び生涯スポーツとしての海洋<sup>(3)</sup>マリンプログラムの展開にあつて、ヨット活動はその一つであるが、昭和47年における活動参加状況では海洋性レジャーとしての枠組みでのヨットは、わずか1.1%の活動参加<sup>(5)</sup>であり、平成2年における余暇活動の潜在需要<sup>(6)</sup>では、男性全体では、8.5%となっている。また、平成4年度余暇活動への参加、消費の実態では、ヨットへの参加人口は140万人で参加率1.4%の範囲に留まっていた、一般的な普及という側面では、ヨットを楽しみとして手軽に楽しむという領域にはいまだ達していない。

本研究では、大学におけるヨットカリキュラムの検討をすすめる、レジャー及び生涯スポーツとしてマリンプログラムを享受する視点に立った時、どのような内容によりプログラム展開をすることが重要であるかを昭和61年(1986年)から平成4年(1992年)迄に実施したヨットプログラムから得た課題(問題意識)を包括的に抽出し、それらの課題解決を図った上で“カリキュラム試案”を創りあげ、そのカリキュラムコンテンツの計画にのっとり平成5年8月2日(日)～23日(月)にマリンプログラムとして実施し、更に今後のヨット授業の効果的なカリキュラム構築をすすめると共に、受講した学生にとって、レジャー活動及び生涯スポーツへの誘いと

しての知識、技術の十分な修得に寄与するケーススタディーとして本研究を実施したものである。

詳細についてのカリキュラム試案とその実施結果については大会で報告する。

## 2. 研究の方法

本研究は以下、既実施ヨットカリキュラムの総括的検討により、カリキュラム試案を作成し、その実施をすることにより効果的なヨットコースの構築をはかる視座から：

検討対象：明星大学体育実技・マリンプログラム(ヨットコース)

調査期間：1986年～1992年(7ケ年)

検討方法：① 各年度毎のカリキュラム(7ケ年, 21コース, 各コース4泊5日)

② 実習履修ノート・個人票航海日誌(410名)

③ 課題聞きとり調査(実習期間中・410名)

④ 事前教育レポート(410名)

以上の内容について精査した。

## 3. 結果・考察

既実施マリンプログラム(1986年～1992年)からのカリキュラムを改訂、修正し、より良いヨット教育と実習を行うために試みられた課題の抽出は、クラスタリングにより6群別に類別された。

その各群別(クラスタリング)は：

(1) 人間間交流としての課題

(2) 自然、人間の交流としての課題

(3) 基礎的技術のカリキュラム構成の課題

(4) 応用技術(クルージング展開)のカリキュラム構成の課題

(5) 安全管理(人, 艇, 自然(可視的自然と不可視的自然))としての課題

(6) 総合的シーマンシップ(Holistic Seamanship)としての充実度(感)、満足度(感)、達成度(感)の獲得としての課題

であり、この課題群の整理、解決こそが「カリキュラム試案」の本体を成すものである。

### (1) 人間間交流としての課題

① グループワーク

② 生活形態に対する集団活動及び集団行動によるチームワークの育成

③ 艇を目的により帆走させる為のクルーの役割りとしての組み込み。

### (2) 自然・人間の交流としての課題

① 役割り分担における使命感を有することからの参加欲の充実

② 自然の力と知識としてのイメージのギャップの認識

③ ヨットを「動」という物体としてとらえるのではなく

むしろ「静」のものとして自然を見ているイメージの払拭

④ 成し得たことのない体験への挑戦(体験としての広がりや深まりとしての実践)

⑤ 自然の力が人間の身体側面に及ぼす要因の実体験

(3) 基礎的技術のカリキュラム構成の課題

- ① 事前教育の展開方法(ビデオ、写真、パネル等の擬似体験により視覚に訴える)
- ② 現在地確認方法と周囲の状況把握
- ③ ヨットの原理と原点としての技術(セーリングテクニックの重大さの理解 = Open technique & Closed technique)

(4) 応用技術(クルージングテクニック展開)のカリキュラム構成の課題

- ① 対応能力の養成
- ② 技術的に基本となる領域の範囲の確認
- ③ 突然、生起する自然への対応
- ④ 高度技術の導入

(5) 安全管理(人、艇、自然(可視的自然と不可視的自然))としての課題

- ① 艇の安全・人の安全・プログラムの安全管理・自然への対応
- ② 臨戦態勢の強化
- ③ 船酔い防止の方法としてクルージングへの姿勢に対する育成
- ④ 五大点検箇所の点検と対策(故障・異常の回避)
- ⑤ 自然の中での人間の五感のときすましの訓練
- ⑥ G.P.S.とレーダーによる危険回避
- ⑦ 高度技術による危険回避
- ⑧ 安全対策下での活動(対策後・行動の仕方)

(6) 総合的シーマンシップ(Holistic Seamanship)をしての充実度(感)、満足度(感)、達成度(感)の獲得としての課題

- ① 人間交流の促進と共同作業
- ② 克己心の強化
- ③ 自主的・積極的・能動的な操船への関与(受講生)
- ④ クルーの役割担当の考慮・適材適所のクルー配置(指導者)
- ⑤ クルージングに対する資質の向上(チームワーク、パートワーク等)  
Span of control (責任範囲) と Chain of command (命令系統)
- ⑥ 成し得たことのない体験への挑戦
- ⑦ 役割分担における使命感
- ⑧ 達成感、満足感、感動体験を得る為の条件設定

以上の内容の課題整理が履修生のデータ及び指導者のデータによりクラスタリングとして得られた。

#### 4. ま と め

過去7年間にわたるマリンプログラム(ヨットコース)の21コース(各コース事前教育を除き4泊5日)延べ410名の履修学生を対象として、カリキュラムの総括的検討を加え各年度毎に課題抽出と課題解決をはかる形態で段階的にカリキュラムの検討をし、年度毎に特色を有してマリンプログラムを実施した。

ヨットのイメージ(シーズンコース"ヨット授業"参加学生の意識調査<sup>(7)</sup>)は、いわゆる"青い海" "クルージング" "青い空" "白い帆" "楽しい"に見られる明るい積極的なイメージであり、実際のクルージング体験によるヨットの認識との間には、ヨットへの積極的かつ肯定的な思い込みや他からの疑似体験として得られている内容との間にかかなりのギャップが存在しているともいえる"乖離概念"に近いものを払拭していくことが大切である。このような観点から事前教育の中においても重要課題として積極的に"乖離概念的イメージ"の除去のためのカリキュラム化を実施した。

抽出した課題のクラスタリング(6領域に群別)と教育領域(Educational Domain)としての知的(Cognitive)、情緒的(Affective)、神経筋的(Psychomotor)側面を十分考慮した上でのカリキュラム構成が重要といえる。

合計410名の学生からの課題を3つの教育領域から整理するとき、総合的シーマンシップとしての充実度(感)、満足度(感)、達成度(感)をどう具体化していくかがポイントとなる。それは各個人としてのヨットマンがこれら6群別された課題解決を積極的にすすめていくことである。当然、カリキュラムコンテンツとして教育の3領域とヨットカリキュラム6群別の要素を限られた時間の中で有効に組み立て、制限された枠組みの中で直接自然活動と間接自然活動とのバランスを考慮することが必要である。実質的クルージングの効果を6群別の課題解決と共にシーマンの育成のためカリキュラムの諸構成要素(Component)の極だたせをできることこそ最重要課題である。その為のカリキュラム試案を作成し、ヨットの帆走(クルージング)を実行した。

#### <参考文献・引用文献>

- (1)(3) 通産省産業政策局編 『スポーツビジョン21・スポーツ産業研究会報告書』  
(4)(5) P.P.10～23 1992年5月
- (2) 鈴木秀雄「生涯スポーツの意味(The Meaning of Life Time Sports)」  
『日本大学桜門体育学研究』第25集 1991年3月
- (6) (財)余暇開発センター編『レジャー白書'93 ポスト・バブルのレジャー』
- (7) 上野直紀・鈴木秀雄 シーズンコース"ヨット授業"参加学生の意識調査  
第40回 日本体育学会大会 1989年10月